

平成 26 年度 農業技術支援センター試験研究等実績概要

1 暖地系ニンニクと寒地系ニンニクの比較栽培について

神奈川県は暖地系ニンニクと寒地系ニンニクの両方を栽培できることから、両系統を栽培し特性を調査した。

(結果)

暖地系ニンニク(品種:平戸)と寒地系ニンニク(品種:ホワイト六片)を露地栽培した結果、1株当たり球径・収量(生球重)・鱗片数は、暖地系ニンニクは56mm・54g・4.4個、寒地系ニンニクは63mm・100g・5.3個であり寒地系ニンニクの方が良い結果であった。昨年の結果でも寒地系ニンニクの方が全調査項目において良好であり、今年の収量(生球重)を昨年度と比較すると、暖地系ニンニクは1割減ったが寒地系ニンニクは3割増となった。このことから、本市では寒地系ニンニクの方が栽培に適していると考えられる。

2 湘南一本の短葉鞘化栽培について

ネギの直売需要の高い夏季収穫を目指す2月下旬播種、7月中旬より収穫となる短葉鞘化ネギ(葉鞘長20~28cm、全長40cmに調整する根深ネギ)は、過去3年間の調査結果から定植後105日前後で収穫できたことから、直売の需要が高い7月から8月に収穫するために4月上旬定植が重要であると考えられるため、定植日、収穫日及び定植から収穫までの日数について調査を行った。

(結果)

2月下旬に播種し4月上旬に定植したところ、定植後110日目の7月31日に収穫できた。過去の試験結果による定植後105日前後よりも6日遅れたが7月中旬に収穫開始でき、4月上旬の定植が短葉鞘化栽培において有効であることが確認できた。

3 秋冬どりニンジンの比較栽培について

ニンジン「優馬」、「京くれない」、「ライム」、ミニニンジン「アムス」、「テルダム」を栽培し、生育特性を調査した。

(結果)

3月中旬に播種、3月中旬に収穫した。ニンジン「優馬」、「ライム」は5寸ニンジン、「京くれない」は5寸ニンジンよりやや長めの特徴がある。根重:根長:根径の平均値及び割れ率は「優馬」182g:15.4cm:4.7cm:40%、「ライム」216g:15.5cm:4.9cm:7%、「京くれない」135g:17cm:4.0cm:27%であった。「優馬」が最も根型がよかったが、割れ率が40%と高かった。「ライム」は肥大よく割れも少なかった。「京くれない」は肥大が思わしくなく割れ率も3割弱あり、ス入りのものもあった。ミニニンジンの根重:根長:根径の平均値及び割れ率は「アムス」82g:14cm:3.0cm:13%、「テルダム」121g:13cm:3.8cm:0%であった。「テルダム」は在圃期間によりミニニンジンから3寸ニンジン大までの収穫が可能であった。これらのことから、冬季収穫用栽培には「ライム」「テルダム」が良好であった。

4 直売向け有望品種の特性調査について

直売に有望と思われるミニカリフラワー「オレンジ美星」、タケノコ型のキャベツ「トンガリボウシ」、ミニパプリカ「セニョリータ」「セニョリータゴールド」を栽培し特性を調査した。

(結果)

(1) ミニカリフラワー

「オレンジ美星」は8月上旬定植、10月下旬に収穫した。大きさは直径10 cm程度、重さは350 g前後と軽量であることから購入しやすく、使い切りサイズのため少人数の家庭で好まれると思われる。日光に当たるほどオレンジが発色し、鮮やかな色は茹でてでも残るため料理のアクセントになる。栽培に関しては収穫時期は「美星」に比べ半月程度早く、また一般的なカリフラワーに比べ1か月早かった。密植でき、ミニで収穫できるが、通常のカリフラワーの大きさまで育てたのち収穫しても食味に問題はなかった。このことから、ミニから通常の高さまで長期にわたり販売でき直売向けと思われる。

(2) キャベツ

「トンガリボウシ」は3月中旬播種、6月下旬収穫と7月下旬播種、10月中旬収穫の2作栽培した。3月播きは柔らかな葉で甘味があった。7月播きはしっかりと葉が巻き重さ1.5 kg以上で甘味のある美味しいキャベツだった。球頭部が尖る特徴のある形が直売では目印になり、一度食べておいしいと思った消費者が再度購入するのではないかと考える。

(3) ミニパプリカ

「セニョリータ」、「セニョリータゴールド」は、2月中旬播種、8月上旬から収穫した。ピーマンと同じような樹形であるが草勢は強くなかった。果実はトマト型～扁平で肉厚であり「セニョリータ」は光沢ある赤色で、「セニョリータゴールド」は黄金色でどちらも鮮やかな色で食卓に彩りを添えるには最適である。栽培に関しては夏場の暑い日差しによる果皮の日焼けや着色果が多く、日除けとなる作物を近くに植える、施設栽培とするなど栽培方法の検討が必要である。

5 ダイコンにおける対抗植物(マリーゴールド:エバーグリーン)を利用したセンチュウ防除試験栽培について

環境保全型農業推進の一環としてダイコン栽培において対抗植物であるマリーゴールド:エバーグリーンを用いたセンチュウ防除効果を検討する。

(結果)

センチュウ被害株率及び被害度はマリーゴールド区(対抗植物区)ではどちらも0、薬剤防除区(ガスタード微粒剤使用)ではセンチュウ被害株率5%、被害度1.25、無防除区ではセンチュウ被害株率90%、被害度51.2であった。このことから、マリーゴールド:エバーグリーンはセンチュウ防除効果が高いと考えられる。またマリーゴールド区のダイコンはねじれや、曲りが少なくマリーゴールドのすき込みによる緑肥効果が影響していると考えられる。

今後はマリーゴールド区のセンチュウ抑制効果が持続する期間について継続調査が必要である。

6 ナシヒメシンクイの発生予察について

ナシの害虫であるナシヒメシンクイの発消長を調査し生産者あて情報提供することで、シンクイムシ類の適期防除に資することを目的として、ナシヒメシンクイを捕殺するフェロモントラップを4ヵ所(多摩区生産者、麻生区生産者、農業技術支援センターウメ園、同樹木園)に設置し、ナシヒメシンクイの発消長をナシ生産者や県等に情報提供した。

(結果)

本年度のナシヒメシンクイの発生世代は、例年と同様に5回観察された。各世代のピークは4月3日、6月4日、7月10日、8月12日、9月18日となった。

発消長と有効積算温度から7月10日、8月10日の世代がナシ果実に食害を加えた世代と考えられるので、この頃の防除が重要であることから、7月10日、8月10日、8月20日頃を防除適期とし、セレサ川崎農業協同組合を通じたメール等でナシ生産者に情報提供した。

今後も調査を継続し、生産者への情報提供を継続していきたい。

7 ナシ赤星病の発生予察について

ナシの赤星病の適期防除を行うため、園内の発生予察樹(カイヅカイブキ)の赤星病菌の冬孢子堆を観察し、発生予察情報を提供することで効果的な防除に資することを目的とし行った。

(結果)

ビャクシン上の冬孢子堆を観察すると4月2日夜からの降雨によりには寒天状に膨らんでおり、この頃から赤星病の小生子が飛散し、ナシへの感染が始まったものと考えられる。その後、4月20日前後の降雨により小生子の飛散のピークを迎えたと考えられる。その後4月29日の降雨により小生子がほとんど飛散し、感染期は終息したと考えられる。

セレサ川崎農業協同組合を通じメール等で発生予察情報を5回(3/31、4/4、4/16、4/23、5/1)ナシ生産者に提供した。予察情報は昨年より2回多くなった。

今後も適切な防除に資するため、予察情報の提供を継続したい。

8 カメモシの発生予察について

ナシ、カキ等の果実を加害するカメモシ類の発生予察を生産者あて情報提供し、適切な防除に資することを目的とし行った。

(結果)

チャバネアオカメモシの年次別の捕殺数は、昨年(137頭)より大幅に多い4,668頭となった。5月下旬から8月上旬まで発生が多い期間が続き、全体に多い年であった。

市内の一部のナシにおける被害の報告があったものの、全体から見ると被害は少なかった。また、カキでも一部に被害が見受けられた。

今後も調査を継続し、生産者への情報提供に努め、被害軽減につなげていきたい。

9 ナシ花粉採取事業及び貯蔵事業について

多摩川ナシの生産安定と品質向上を図るため、セレサ川崎農業協同組合との共同事業として、花粉の開葯及び貯蔵事業を実施した。

(結果)

生産者から平成25年4月に預かり、農業技術支援センターで1年間貯蔵した花粉(41件)の預かり時平均発芽率は85.5%で、返却時平均発芽率は78.9%で、人工受粉に供するに十分な保存状態であった。

平成26年(平成26年4月1日～4月15日)は交配可能面積として18.1ha分の花粉を取り扱った。

次年度交配用の貯蔵花粉の預かり件数は76件であり、貯蔵前の平均発芽率は81.8%であった。

10 太陽熱を利用した土壌消毒によるカンパニュラ菌核病の防除について

環境保全型農業推進の一環として、太陽熱を利用した土壌消毒によるカンパニュラ菌核病の防除効果を検討した。太陽熱消毒区、ガスタード処理区、及び対照(無処理)区を設け、菌核病の発病率並びに切花の収量及び品質について調査を行った。

(結果)

いずれの試験区においても菌核病の発生が認められず、土壌消毒による防除効果を確認することはできなかったが、太陽熱消毒区では切花長が長くなる傾向が見られた。これは投入した有機物により土壌の物理性が改善されたことによるものと考えられる。また今年度は全体的に2月の

大雪の影響で芯が傷み、分けつ茎が細いものが多かった。

11 夏咲コギクの生育特性調査について

お盆に合わせた出荷が可能な夏咲コギクについて検討するため、有望と考えられる7品種（7月咲桃色在来、7月咲黄色在来、「夏の星」、「風鈴」、「まこと」、「しらかば」、「あすか」）を対象に生育特性を調査した。

（結果）

生育の良否、開花時期、切花の品質等について調査した結果、7月咲桃色在来、7月咲黄色在来、及び「風鈴」が7月のお盆出荷に相当であると考えられた。また、「まこと」及び「しらかば」が8月のお盆出荷に相当であると考えられた。そのうち「まこと」「夏の星」及び「あすか」は、収量が他品種と比べて低いため、営利栽培には不向きであると考えられた。

12 露地切花栽培における防虫ネットを利用した鱗翅目害虫の防除について

環境保全型農業推進の一環として、羽毛ケイトウ、久留米ケイトウ及びヒマワリを対象に、防虫ネットの被覆による鱗翅目害虫の防除効果を検討した。あわせて、防虫ネットの被覆が切花の品質に及ぼす影響についても調査した。

（結果）

ヒマワリと久留米ケイトウについては、害虫の被害率が試験区では対照区の約半分に抑えられ、羽毛ケイトウでは4分の1以下に抑えることができた。また、ケイトウについてはいずれも切花長は試験区及び対照区でほぼ変わらなかったが、茎の太さが試験区の方が細くなる傾向が見られた。ヒマワリについては品質に防虫ネットの被覆の影響はほとんど受けなかった。

13 シクラメン栽培における排液分析値を用いた施肥管理について

シクラメン栽培において排液分析による施肥管理を行うため、市内シクラメン生産者の協力を得て、生育期間を通じた排液の肥料成分濃度の経時的変化を調査した。また、生産者ごとの栽培体系についても聴き取り調査を行った。

（結果）

排液の硝酸態窒素濃度、pH、及びECについて分析を行い、生育期間を通じた肥料成分濃度の経時的変化及びそれぞれの適正值をおおむね把握することができた。また、分析結果を生産者へ随時情報提供することにより、施肥管理の指標として活用することができた。生産者ごとの栽培体系についても資料に取りまとめ、生産者同士で情報の共有を図ることができた。

【共通部門】

14 平成26年度土壌分析結果について

市内露地野菜、施設野菜、果樹等の生産基盤である土壌等について、化学性の分析及び診断指導を行った。

（結果）

区分	露地野菜	施設野菜	果樹	花き*	その他	養液分析	計
件数	551	84	127	353	0	350	1,465

* 花きにはシクラメンの排液分析250件を含む。

** 養液分析は横浜・川崎養液耕研究会345件を含む。